

日本語の一人称代名詞について

韓 成龍

俺は女だ。と、ある漫画のワン・カットでボーイッシュな女性が言っているが、その登場人物達に信じてもらえない。その理由は言うまでもない。そして、これを韓国語に翻訳しても作者の意図・効果は全然伝わるはずがないのである。なぜなら、もともと韓国語には（現代韓国語）「俺」とか「あたし」などという、男性と女性を使い分ける一人称代名詞ないからである。大江健三郎が彼のノーベル賞受賞演説で「翻訳は反逆だ」という話をしているが、まさにそうではないかと思う。日本語を勉強するにつれ、韓国語に訳すことの難しさをつくづく思い知らされているが、このレポートでは日本語の一人称代名詞を取り上げたいと思う。その調査方法は、漫画や小説の登場人物達の使っている一人称代名詞を調べることにする。

1. 一人称代名詞

一人称代名詞とは、「...話し手の表現はいかなる場合も話し手個人の意見であり、話し手はそのつど、自分を指示しなければならず、...話し手の自分自身および相手を指示する記号が必要になってくる。言うまでもなく、話し手自身の指示記号は一人称代名詞であり...」¹である。英語の場合、「I」の一つしかないように思われるし、韓国語にも二つしかないのである。それが日本語の場合、どういうわけかざっと見ただけで二桁にのぼっているから珍しい。それに今から書くのは全部、少なくとも一回以上は私が経験していることに基づくものだから死滅しているわけでもないのである。これほど多くの似たもの同士が共存しているのはなぜか。見てみよう。

2. 「わたし」と「わたくし」

形からして両者はよく似ている。漢字で書く場合にも「私」と書いて振り仮名のつけ方によって区分する場合も少なくないのである。まず「わたし」だが、これの最も大きな特徴は男女区別なく使える点ではないかと思われる<表1>を見ると

<表1> 「わたし」の使用分布

	10歳以下	10代	20代	30代	40代	50代以上
--	-------	-----	-----	-----	-----	-------

男	—	—	20 : 1	8 : 1	17 : 7	27 : 7
女	4 : 1	17 : 11	34 : 15	7 : 4	13 : 5	2 : 1

*「—」は使用例なし

*「20 : 1」は使用例20人のなか、一人が「わたし」を使っている（以下の表同じ）
10代以下の男性の使用例は見られなかったものの、男女ともにひろく使っていることが分かる。この「わたし」に限っては例をあげるのが無意味に思える。なぜなら、つかみどころが見つかりにくいからである。先も述べたように、男性の子供を除いてすべての年齢層で使われているのに加えて、普段は別の一人称代名詞を使っていた人までも、改まって言う時は、この「わたし」を使うほど一般性を持っているのが、その理由である。

次に「わたくし」だが、まず「わたし」を辞書で引いてみる¹⁾と、『自分を指す言葉。「わたくし」よりはくだけた言い方』とある。つまり、「わたくし」とは「わたし」より丁寧な言い方である。従って、公の場などで、多くの人々を前に話す時などに用いるのが普通で、一般的な会話ではあまり使われてないのである。時々、上品な言葉遣いのお嬢様口調として使われている。

<表2>「わたくし」の使用分布

	10歳以下	10代	20代	30代	40代	50代以上
男	—	—	—	—	17 : 1	27 : 1
女	—	17 : 1	34 : 2	—	13 : 2	—

もう一つ「わたくし」には役割があって、むしろその方でよく使われているのでは、と思うのである。それは、一人称代名詞としてではなく、公の反対の意味での「わたくし」で、「わたくし事」「わたくし小説」がある。

3. 「あたし」と「わし」

両方とも、「わたし」に似ていることからみて、「わたし」の派生語ではないかと思われるが、この二つにはちゃんとした限られた使用層がいる。まず例を見よう。

- (1) あたし、あなたと結婚するの（園児、女）「クレヨンしんちゃん」
- (2) 困るわ、あたし人間が好きなの（高校生、女）「うる星やつら」
- (3) あたしと取引先、どっちが大切なの（20代主婦）「クレヨンしんちゃん」
- (4) あたし、あなたがきらいになったの（40代OL、女）「悪女」

上の4つの文はそれぞれ違う作品からとったものである。年齢から見ると、(1)が園児、(2)が高校生、(3)は30代の主婦、そして(4)が50代の会社の幹部であり、みんな違う年齢層で、違う状況下で話をしているのである。そして一つだけの共通点と言

えば、話し手が皆、女性であることである。辞書を引くと『「わたし」の口頭語的表現。〔主として女性語〕』であって、ただしつき女性語とは書いてあるが、今まで一般の男性が使っているのを見たことはなく、いわゆるオカマと呼ばれる人に限って見られる。実際、小説で男女二人の会話がずっと続いていて、途中からわけが分からなくなったときがあったが、この「あたし」を見て混乱から立ち直った覚えがある。つまり、「あたし」とは女性語と定義してもいいのではないだろうか。

(5) あたしとつきあいたいんだって (40代オカマ) 「3x3 EYES」

<表3> 「あたし」の使用分布

	10歳以下	10代	20代	30代	40代	50代
男	オカマ以外なし					
女	4 : 3	17 : 5	34 : 17	7 : 3	13 : 6	—

これもまた一部の階層の人々しか使っていない「わし」である。さっそく例をみると

(6) わしとしては珍しいことなんだが、なぜか (40代、男) 「ラフ」

(7) わしはただここで休んただけじゃぞ (70代、男) 「ラフ」

(8) わしが黒じゃが... (60代、男) 「悪女」

である。まず年齢を見ると、(5)は40代、(6)が6～70代で、(8)は60代である。話し手が3人とも男性であって、年齢が高い。つまり、「わし」は男性の高年齢者が使う言葉であり、その辞書的意味は、『男性の老人または力士などが、「おれ」よりは少し改まった気持で使う』である。「わし」の使い方を注意深く調べてみるともう一つの特徴があらわれる。

(9) わしは何をしたと言うのじゃ (70代、男) 「らんま2分の1」

(10) なんでわしの誕生日が災いじゃ (70代、男) 「うる星やつら」

と、「わし」と言った後、普通なら「～である」「～だ」の出るところで、かなりの確率で「じゃ」が出てくる。上の5つの例文の中でも、4つがそうであって、文(5)だけが「～ことなんじゃが...」ではなく「～ことなんだが...」と出ている。実は文(5)の話し手は高校生の親であって、平均的な年齢からしてもまだ「わし」を使うには少々早いのではないかと思われる人で、個人的好みによって「わし」を使ってはいるものの、まだ老人ではないから「～じゃ」をひかえたと思われる。

以上で述べたように、「あたし」や「わし」は「わたし」と「わたくし」とは違って性別または年齢によって使い手が限られている特性を持っている。しかしそれは「こういっ

た人なら使わなくてはならない」ものではなく、一定の条件を充足した人なら好みによって使えるということだと思う。

また「あたし」と「わたくし」を合体させたような形の「あたくし」という言葉もあるが、これは言えば「わたくし」の女性型とでも呼ぶべきではないかと思う。

<表4>「わし」の使用分布

	10歳以下	10代	20代	30代	40代	50代以上
男	—				17 : 5	27 : 14
女						2 : 1

4. 「ぼく」と「おれ」

このレポートのはじめに「俺は女だ」という文を紹介したが、この文は文法的に何の間違いもないのに、日本人から見るとおかしいと思うに違いない。理由は簡単で「おれ」の持つ意味と「女」がかみ合わないからである。つまり「おれ」というのは『男が同輩・目下の者に対して使う一人称』と辞書にのっているように、「自分は男だ」という意を内包しているのであって、それを「俺は女だ」と言っては矛盾が出来てしまうのである。

(11) 俺はそう答えるのが嬉しかった (20代、男) 「イン・ザ・ミソスープ」

(12) そんな俺が許さん (10代、男) 「うる星やつら」

(13) 俺だっておめえとじゃやだよーだ (30代、男) 「クレヨンしんちゃん」

もちろん3つとも話し手は男性である。(10)が21歳のフリーターで何かを考えているところ、(11)が高校生で友達に、(12)が30代のサラリーマンで自分の子供に話している。次の例をみると

(14) ぼくにですか (10代、男) 「うる星やつら」

(15) ち、ちがいます。ぼくは... (30代、男) 「クレヨンしんちゃん」

(12)と(14)の、そして(13)(15)の話し手は同一人物であって、「ぼく」と「おれ」を使い分けている。聞き手は(14)が好きな女性で、(15)は子供の担任先生である。「ぼく」の辞書的意味を調べると、『感情的にはアナタのシモベに過ぎない私、の意で、もと、男子の謙称〕男が同等(以下)の相手に対して使う、砕けた自称』である。つまり、「ぼく」と「おれ」は相手に対して自分の位置付けをどうするかによって決められる、男性の言葉である。

また「ぼく」にはもうひとつ違う使い方がある。

(16) ぼくたち、この家、住みやすい? (30代、女) 「テレビのCM」

(17) ぼくう、いくつ? おかあさんはどこ? (20代、女) 「クレヨンしんちゃん」

(13) は最近テレビCMでよく見かけるシーンで、男の子二人にあるおばさん質問しているところで、(14) は迷子になった男の子に迷子センターの人が話しかけるところである。以上の二つの例で分かるように「ぼく」は、名前をよく知らない男の子供に呼びかける二人称代名詞としても使われているのである。

<表5> 「ぼく」の使用分布

	10歳以下	10代	20代	30代	40代	50代以上
男	13:4	30:6	20:14	8:4	17:0	27:3
女	—					

<表6> 「おれ」の使用分布

	10歳以下	10代	20代	30代	40代	50代以上
男	13:7	30:24	20:5	8:3	17:4	—
女	—	17:1	34:1	—		

* 10代・20代女性が「おれ」を使っているのは、作者が「オチ」としてつかっている

以上で紹介したのが現代日本語で見られる主な一人称代名詞である。これら以外にも「おら」「おいら」「うち」「われわれ」「じぶん」...のように数々の一人称があるが、いずれも方言であったり、昔の言葉であって、現代標準日本語で直接に触れる機会はないと思われる。ただ、昔を背景にした小説や漫画などで度々経験したのが上で述べたものくらいで、ここで簡単に紹介してみたいと思う。

まず「おら」は「おれは」・「おれ」の変化型で、その辞書的意味は、『江戸時代、男性が用いるのがふつうであったが、女性も使った』である。次に「うち」は『自分。わたし。関西方言で、多く婦女子が使う』であって、方言だけに「わし」の「～じゃ」のように述語などに方言と一緒に来る場合が多い。「おいら」は『おれら。われら。おれ。主に男性が用いる語』で、「われわれ」は『自分の謙称。わたくしのようなもの』の意もあるが、演説などで「わたしたち」の意で使われるのが目立つ。また「じぶん」は旧日本軍で一人称で使われたこともあったが、今は「自分」というと「おのれ」「自分自身」の意で通じるのが普通のようなのである。

まとめ

以上で見た一人称代名詞をもう一度ここでまとめてみることにする。まず「わたし」だが、<表1>を見れば分かるように、もっともひろい使用者層を持っている。「わたくし」

とともに、普段は別の一人称代名詞を使っている人でも、改まった気持ちで話す時、または自分を控え目に表したい時に用いることが多い。男性の場合「わたし」は、プライベートな時より、仕事場などで目上の人と話す時に使っているのがほとんどであるのに対して、女性は老若関係なしに普通に使っている。「わたくし」は「わたし」よりも控え目な表現であって、日常生活より公の場で使われる例が多い。

「わし」は年寄りの男性が使う場合が多いが、女性の使用例もなくはない。

次に「あたし」や「ぼく」「おれ」はいずれも性別によって使い分ける言葉である。「あたし」は女性のほとんどの年齢層で使われていて男性は使わないのが普通である。「ぼく」と「おれ」は「あたし」とは反対に男性だけが使っている。「ぼく」は「おれ」に比べて控え目な表現である。

おわりに

以上で現代日本語で代表的に使われている一人称代名詞を見てきた。ということは、これら以外にも多数のものが存在しているということになる。どれくらい使われているかの問題は別にしても、一人称だけではない。二人称代名詞は一人称以上に数多くのものがあって、これら一人称と密接に関係しながら使われるのである。これは一体何を意味しているのだろうか。封建社会の厳しい身分制度の名残かどうかは分からない。ただ、これだけの一人称と二人称が存在して、自分の状況、そして相手との関係によって使い分けている、しなければならない事実だけは確かである。

ここであだここの批評を加えるつもりはない。ただ日本語の特色のひとつとして受け止めていただいだけである。「俺は女だ」という簡単な文だけで笑えたり、話し手が自分と相手のことをどう呼んでいるかだけで、少なくない情報を得られる、というのなかなか魅力的ではないだろうか。

<参考文献>

あだち充、ラフ、小学館

あだち充、H2、小学館

高橋留美子、うる星やつら、小学館

高橋留美子、らんま2分の1、小学館

高田祐三、3x3 EYES、講談社

深見じゅん、悪女(わる)、講談社

臼井義人、クレヨンしんちゃん、白泉社

村上龍、イン・ザ・ミソスープ、読売新聞社東京

村上龍、トパーズ、角川書店

岩波国語辞典第5（電子辞書）

亀井孝、言語学大辞典第6巻術語編、三省堂